THE BOOK REVIEW PRESS
図書新聞
movie
2881号
定価240円
（本体229円）

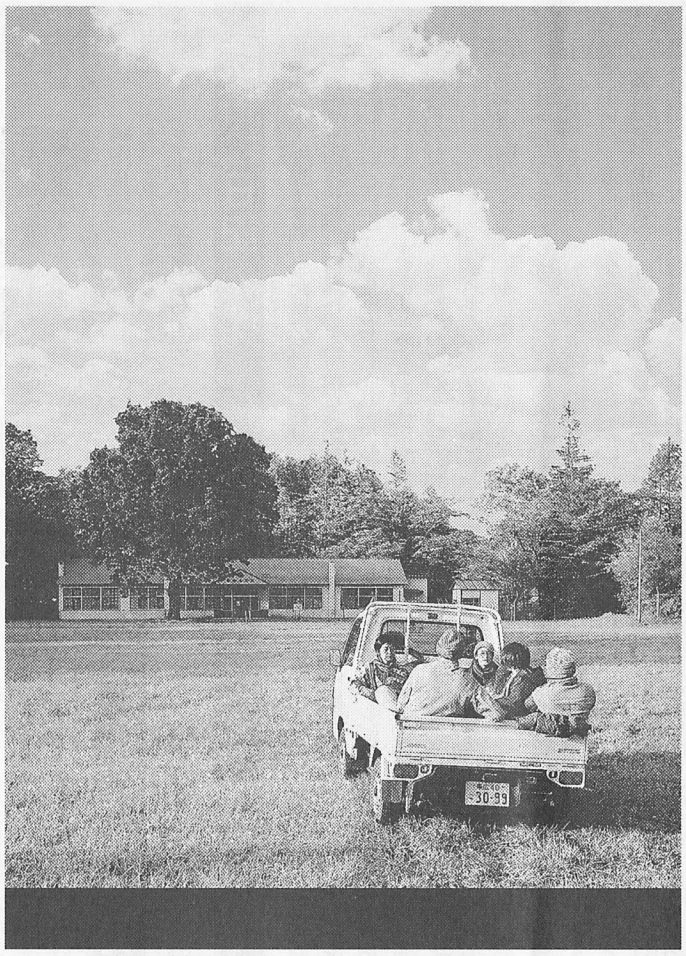
www.ss-s.co.jp
TEL 03(3399)8592
新聞集成 昭和編年史
（有）新聞資料出版
各巻定価 26,250円

自らの暴力に無自覚的な者を観客対象として

田代陽子監督『空想の森』

ちからまかせ映画評 第40回

谷岡雅樹



『空想の森』は、ポレポレ東中野にて公開中。
ポレポレ東中野HP＝www.mmjp.or.jp/pole2
映画公式HP＝www.soramori.net

今公開中の映画で最も面白く観たのは『カメレオン』だ。欠点も含めて私のストライクゾーンだからでもあるが、これがさっぱりヒットしていない。監督の阪本順治は、使い切れるカードと、使うことのできる予算内での駒を使い切り、使い尽くして、現状可能なすべての力を出し切っている。製作プロデューサー黒澤満は、松田優作のハードボイルド・アクション路線を敷いた生みの親であり、この作品もまた、生前の松田優作のために書かれたシナリオで、プロデューサー人生の集大成の一つとして敢えて選ばれた企画だ。したがってこの映画を定義するなら、クライム・アクション、ハード・ボイルド、暴力映画、男の東映映画ということになるが、もっというとバブル以前の映画、9・11以前の映画、或いはまだ日本映画が熱狂的なファンを獲得していた時代の映画ということになる。

それは特にテーマについて言える。日米安保闘争や成田闘争など、日本には世界を瞠目させた「市民運動」がかつて存在していて、その余韻が、映画を観る層のなかにも、はっきりとシンパ或いはアンチ、もしくは対象として捉えられるだけの気になる存在として隣にいた。不入りの原因は、いろいろな面があるが、このテーマが、今の日本人に受け容れられていないということだろう。つまり、個人の復讐譚が巨悪の告発とダイレクトに結びついてカタルシスを呼ぶという絡繰りが、どうにもピンと来ない。古臭い。説得力を失った。或いは嫌悪さえ起こさせる。田坂圭子、中島ゆたか、竹田かほり、りりィ、風吹ジュン、小林麻美といった安っぽいヒロインの系譜を次ぐ水川あさみが、はすっぱな声を枯らし、東映ニューヒーローの一人、藤原竜也が走る。悪役には、黒澤満が始動し幕を閉じた東映Vシネマで培ってきた菅田俊と豊原功補が、まるで成田三樹夫、小池朝雄のごとく登場し、そして佐藤慶に当たる大物には、阪本組の重鎮・岸部一徳が味を出し切る。主題歌も、前野曜子張りのシギ。つまりは『蘇える金狼』である。七九年に封切られたそれは配給収入（興行収入の約半分）八億五千万円のヒットを飛ばした。しかし当時以上に大企業の独占化は進み、談合、偽装、公的なカネをめぐる不正がまかり通るような現在、巨悪にの、その映画祭を運営するもの、その周辺の生活に興味を持ち、自身や世界のあり方を考えようと記録した一人の女性が、初めて監督した作品である。

『空想の森』。この奇妙なタイトルの映画は、表題を掲げる北海道・新得町の映画祭をきっかけに、映画というもの、その映画祭を運営するもの、その周辺の生活に興味を持ち、自身や世界のあり方を考えようと記録した一人の女性が、初めて監督した作品である。

非日常たるフィクション、すなわち劇映画が（観客の血を喚起する）暴力に向かうとするなら、日常を切り取るドキュメンタリーは、対照的に非暴力な話し合いに向かうものだ。それゆえ地味で、今のように欲望にせっかちな時代には受けもよくない。聞こえてくる言葉は、「内容が重い、暗い、小難しそうだ、面倒くさい、向き合いたくない、楽しくない、少数派っぽい」というものだ。異端を差別することに頓着しない国の民らしい発言とも言える。もはや、映画館をイベント会場にしてしまうような軽くて楽しい肩のこらないバラエティーの延長番組か、親子で楽しめる角の取れたアニメでしか食指を動かされないほどに、欲望に麻痺した連中が跋扈している今、注目されるでもない北海道の町の無名の人々のドキュメントなど誰が見るものか。欲深い彼らはいつも物足りない。切迫した問題でも先送りできる限りは先送りして済ませてきた人間はいつも欲求不満で、アニメもバラエティーもバッシングも（それらはみな祝祭だ）、飽きるまでやり続ける。その一時の休息にでも、この映画が指し挟まる余地はあるのだろうか。繰り言ばかりを述べても仕方がない。この文章自体の無力を恥じつつも、我が五分の魂、薄っぺらで安っぽいイベント以上に、もっとずっと根源的な欲情を掻き立ててみせるわい。

まずこの映画の何が凄いといったって、子どもが泣いて、しかし泣き止むまで撮っているその画である。美しいとか綺麗というよりも神々しさを感じたのだ。

以前私は、欲望の塊の主婦が、絶叫にも近い悲鳴を上げたのを聞いたことがある。それは、夏休みに入った子どもを連れて動物園なり遊園地に行く。通勤ラッシュに遭遇する。主婦は戸惑う。かつ子どもは泣き、周囲は、はた迷惑だというそぶりをあからさまに見せる。そうだ、ここは大都会・東京なのだ。助けてくれるどころか、みな犯罪者と敵対する警察官みたいな存在と化す。味方など一人もいない。という結論だった。

しかし『空想の森』では、泣き喚く子どもをあやすこともなく放って置く。私も初めは、うるさいなあと錯覚してスクリーンを観ていた。だが考えてみたら、そこは東京の満員の電車内でもなければ、ビジネスという名のスーツが忙しく行き交うホームでもない。だだっ広い畑の真ん中であって、耳を澄ませば、聞こえてくるのは風の音と虫の声ぐらいである。バッシングの相手（公共の場所に子どもなんか連れてくるな！）を血眼になって探す都市の住民によってそこかしこから見張られているわけではないのだ。周囲には誰もいない。誰もいないということは、「うるさい」としかめっ面をする「敵」もまた誰もいない。

都市は、出来たてのころ（高度成長期）は田舎のしがらみを極力排除していった。結果、そのジュニアの世代である「自分探し（自分大好き）」人間にとっての居場所としては、一見住みやすかった。棲息するにはちょうどよかった。他人と接しなくても自給自足しなくてもコンビニがあり、コインランドリーがあり、宅配サービスがある。しかしそれは隠れ家であって、単に見えない場所でしかない。居場所でもなんでもなく、忙しい人間が烏合の衆となる中では死角となって、あるいは他に夾雑物が多すぎて目立たずに見過ごされている場所である。決して獲得したり、認められ保障されたりした「居場所」とは違うのである。そこでは、他人の責任にする材料もまた、無数にある。

畑の草むしりをしながら、泣いている子どもをニコニコと横目にみつつ仕事を続ける母。「はい、見えてるよ」。泣き声に呼応するような母の声。大声で大空に向かって大地が張り裂けんばかりのような泣き声を発しているのだけれど、やはりうるさくはないのだ。音量からするとかなりなのだろうけど、どうってことない。事実、風のそよぐ音がかぶさる。このシーンだろうな、と思った。私もドキュメンタリーを撮ったことがあるが、八十時間以上カメラを回しても、まだ足りないと思っていた。理由は決め手がなかったからだった。どうして決められないのか。そのうち、時間切れ、資金切れ、堪忍袋の緒が切れ、スタッフをつなぐ糸も切れた。

自然と泣き止んだその一瞬。撮り終わって、すぐに「これだ」なんて思ったわけじゃないだろう。それから何年か経って、「この映像だ」と思ったに違いない。いや、この推理が外れていても、この映像に賭けた気持の揺れは、恐怖と隣り合わせの孤独、悲しみ、葛藤について、私も少しは感じ取れる。

暴力の始まりは、一人でいても自然であることが、他者が生まれることで自然でなくなることだ。ありのままに手足を動かしても、そこにぶつかる人間が存在することでいさかいが始まる。都市のように人が密集していれば、身体に触れてそれが「暴力」となる。だけど、手足をのびのびと動かすくらいのスペース、それはステレオタイプに「言わされた」アンチな発言ではない。「バッシング万歳」都市に対して苦言を呈するという立ち位置も、敢えて見せてはおらず、被写体との位置関係を見せることでGOサインを出したのだ。決して自身の成長記録を見せびらかす自慰的な作品ではない。それは、一度築いた関係をご破算にして、既になれた発言の、その向こうを切り取るまでの長い旅だった。途中で「それらしく」形作ることはできたはずだ。しかしフィルムを捨て、体裁、肩書き、枠組みも捨て、垣根を取っ払い、自前のバンドの音を使って自分たちの形の結果を出した。「ワクワクしていました」という言葉そのままの姿が七年の歳月をかけ浮かび上がった。

暴力に飢え、話し合いに飽きた、こんな時代だからこその1本だ。観てくれ。

（Vシネ批評）

はじめに、ナレーションも兼ねる監督の田代陽子の声が聞こえてくる。第1回空想の森映画祭で、上映後にはじめてフィルムというものに触った。「夜はスクリーンの前で車座になり、お客さん、スタッフ、ゲストも一緒に飲んで歌って踊りました。この場所で私はワクワクしていました」と。この言葉から推理するに、はじめはフィルムで撮影を始めたのだろう。しかし出来上がっているのはビデオだ。頓挫し、集めた資金も一度はご破算となり、トラブルのあったであろうこともわかる。しかし、突っ切った結果がここにある。

バッシングというマスゲームからどれだけズレて人と出会えるか。魔女狩りゲームからどれだけ無関係に自分たちだけの確かな関係を結べるか。劇中、「お金があっても幸せじゃない」というシーンを映し出してもいるけれど、

文学を中心に
絶版本、貴重書、雑誌バックナンバーなど、6000点掲載の目録です。
最新号のみ…500円／年会費（年4回分）…2,000円 ※送料込
申込先 TEL.(03)3291-1479 FAX.(03)3291-1430
古書 けやき書店
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-9 下倉ビル6F